

「深いグレ子は他人の中に見える」のもとのシーン
マサユキが涙します。

感情の法則 & 閉じ込められた子供

黙って考え込んでいたマサユキが口を開いた。

「ご存知のように私は弁護士をしているんですが、これが本当に自分のしたいことなのかと感ずることがあります。弁護士という仕事は一般的な仕事に比べて収入もいいですし、社会的な地位も高いのですが、もっと大きなことをしなければいけないという気があるんです。離婚したことが原因なのかなとも思っていたのですが、これからも仕事に満足を探めていくべきなのかそれとも他に幸せを求めべきなのか、どちらなのでしょうね」

クミは、収入が得られればほとんどの問題は解決できると思っていた。しかし、収入がたくさんあっても問題はあんだなと新鮮な驚きの気持ちで聞いていた。

皆の注目がマサユキからヒロへと移動する。

「ええと、今の質問は、要するに『私は今あまり幸せを感じていないようです』ということなんですか？」

「いいえ、幸せは幸せだと思います」

明らかにマサユキは怒りで緊張していた。マサユキはヒロからズバリ言い当てられることが我慢できないようだった。

「マサユキさん。ちょっと立ってもらえますか」

怪訝な表情をしながらもそれに従った。胸を張ってあごを少し出して立っている姿は挑戦的に見えた。

「マサユキさん、ちょっと目を閉じてもらえますか。はい。今立ってもらいましたが、たった今までの椅子に座っている自分が、まだ椅子に座っているところを思い浮かべてみてください」

マサユキは「はい」とうなずいた。

「目を開けていいですよ。座っている過去のあなたは、僕、ヒロに対して何か怒っています。許せない気持ちでいます。それは何に対してですか？」

ヒロ以外の全員が驚いた表情をする。誰もがこんな展開になるなんて予想していなかった。

「えっ？言ってもいいんですか？」マサユキもすこし心配そうに確認する。

「はい。もう一人の過去のあなたが感じていることを教えてください」

マサユキは空いた椅子を見てしばらく考えていた。

その間、クミも他の3人も体を緊張させて構えていた。

ついにマサユキが咳払いをして口を開く。

「考えを一時的に押し付けるところ・・・なんでも暴くところ・・・それから無能扱い

するところ」そしてまた咳払いをする。

クミは怯えていた。もうこんなことは止めてほしい。ヒロもきっと気分を悪くするだろう。楽しいオレンジレッスンの雰囲気が台無しになってしまう。それにしてもマサユキがそんなふうに見えていたとは驚きだった。クミから見たらヒロは気を遣っているし、むしろ優しく接しているようにしか見えなかった。

「ありがとうございます。一度深呼吸をしてみてください。それに対して座っているマサユキさんはどう感じていると思いますか？」

「どう感じているかですか。イヤだ・・・むかつく・・・頭にくる・・・」

言い方から怒りを押し殺しているのが伝わってくる。怖い。クミは誰かが怒っているのが耐えられない。

「そう感じていたんですね。ではその感情よりももう一段深いレベルに降りてみます。どんな感情がありますか？」

最初は首をかしげていた。小さい声で言葉にし始めた。

「イヤだけど・・・悲しい・・・かな」

「分かりました。悲しいって感じてるんですね。では、本当はどう扱ってほしかったのですか？」

マサユキは口をへの字にして眉間にしわを寄せて大きなため息をついた。

「もっと・・・分かっているし信じてほしかったです」

胸に溜まった辛い感情を大きく息を吸い込んで吐き出した。

「そうですか。あなたは能力があるってことを信じてほしかったんですね。

感情の法則というのがありまして、今、感じている気持ちのうち、現在の感情は 10%しかないんです。残りの 90%は過去の感情を再体験しているんですね。それは過去の出来事や誰かに対して感じたものなんです。椅子に座っているもう一人のマサユキさんは、目の前のヒロに対して『考えを押し付けられた、無能扱いされた』と感じたわけですが、感情の法則に従うなら、それはヒロという人物に過去の誰を映し出して見ていると思いますか？」

「・・・あっ！」

マサユキは愕然とした。

「・・・父です」

それが分かってからというもの、マサユキの態度が明らかに柔らかくなった。

「感情の法則を知ると過去の感情に操られなくなりますね。では、さっきの中断した続きをやりましょう。どうぞ座ってください」

マサユキが席に座った。ヒロ以外の全員が何を中断していたかもすっかり忘れていた。

閉じ込められた子供

「さっき『幸せは幸せだと思ふ』と答えていただきましたが、その幸せな感じは自然なものですか？それとも幸せだと思わないといけないと感じているものですか？」

ヒロはマサユキから攻撃的な言葉を向けられたがまったく動じていないようだ。クミはただ「すごいなあ」と感心していた。

「ああー、どちらかという幸せだと思わないといけないという感じですね」

ヒロが質問を変えた。

「マサユキさんは弁護士というお仕事はお好きなんですか」

「ええ。好きです」

「そうですか。仕事が好きだと言える人と会うと嬉しいですね。ご両親はご健在ですか？」

「父は他界しました。母親は分かりません。失踪しました」

クミも父親が家を出て行ってしまっただけで今もどうしているのか分からない。共通点が見つかってマサユキに親近感を感じた。

ヒロはイスから立ち上がるとマサユキのイスの隣に立ち、肩を軽く叩いてそのまま手を乗せた。とても親しみのこもったコミュニケーションだった。

「そうですか。挑戦のしがいのある家庭環境だったようですね。お父さんはあなたにとってどんな人でしたか？」

「それなりに尊敬していますね。父は会計士だったのですが、会計士としては優秀だったようです」

「お父さんは目標でもあったんですね。お父さんは人生に対してどんな態度でしたか？」

「いつも仕事に全力を注いでいました。ほとんど家にいても仕事のことで頭がいっぱいだったようです」

「子供のころ、そのようなお父さんを見てあなたはどう考えましたか？」

「うーん・・・いっしょには遊べないと思いました」

「本当はいっしょに遊びたかったんですか？」

「はい。でも、そう思う自分を消すように努力しました」

「お父さんの邪魔をしないように？」

やり取りを聞いていて、クミは胸が締め付けられる気がした。マサユキは子供だったとき必死でお父さんの邪魔をしまわぬように我慢したのだ。息子の隆志と重なった。

「そうです・・・あ、そうか！」

「答えが見つかったようですね。おめでとうございます。あなたは“消す”といいましたが、それが自分では気付かないグレ子を生んだ原因であり、今幸せを感じられない原因だったのでしょうか」

「ああ・・・なるほど」

「子供のあなたが閉じ込められているんですよ。あなたの心の中に。あそこのドアを見てください」

ベッドルームのドアを指差した。

「あそこはあなたの心の中だと思ってください。あの中にお父さんと遊びたい子供のころのあなたが閉じ込められています」

マサユキは恐ろしさと興味の感情をたたえた目でドアを見ていた。

「目を閉じて。イメージの中であのドアを開けて部屋の中を覗いてみてください。さあ、お父さんと遊びたかったけど、それをがまんしていた自分が立っているところを想像してくださいね」

「はい」

「どんな様子ですか？」

「とくに何も見えません・・・浮かんできません」

「では、声や音は聞こえますか？」

「・・・『あーあ』ってがっかりしている声が聞こえます。そういえば、遊んでほしくて近づくとお父さんによく怒られました。・・・とても悲しかったですね。すごく怒られたときがあって、それからは遊んでとは絶対に言えなくなってしまいました」

「子供のあなたは何か心で決めましたか？」

「うーん・・・わがママを言うことはもうやめようと思いました」

「本当は遊んで欲しかったんですよね。もしお父さんがどんなリクエストにも応えてくれるとしたら、どんな遊びをして欲しいですか？」

「プロレスごっこをしたいです」

クミは子供のマサユキがお父さんとプロレスごっこをして遊んでいる姿を想像すると、なんだか胸が熱くなる。堅いよろいの下ではそんな子供らしい心があった。それがずっと叶えられずにいたのだ。

「お父さんにたっぷりプロレスごっこをして遊んでもらっているところを想像してください」

それが終わるとマサユキは「ちょっとトイレに行ってきます」と席を立った、その目には涙が溜まっていた。

トイレで“化粧直し”をしたマサユキが戻ってからヒロが説明した。

「僕たちの潜在意識には、たくさん振る舞いのパターンが刷り込まれています。それは子供時代に、生き延びるためには必要だったかもしれません。たとえば、注目のされ方とか、暴力を振るう親からの逃げ方だとか・・・ですね。

その中には自分の欲求を押し殺すという方法もあったというわけです。でも、当時は良い方法だったとしても大人になって幸せに成功するためには邪魔になってくるものも当然

犬飼ターボ 「オレンジレッスン。」未公開シーン

あります。閉じ込められた子供は出してあげないとグレ子となってトラブルを巻き起こします。今となってはもっと新しくて効率的に進みたい方向に連れて行ってくれる方法を新しく選ぶ必要があるんです。成長して人生のステージが変われば、それに合わせて新しいやり方に変えたほうがいいですね。

マサユキさん、もし誰かに遊んで欲しかったらどうすればいいと思いますか？」

「んー……」

この簡単な質問にマサユキは考え込んでしまった。弁護士の難しい法律知識はたくさん知っていても、遊んで欲しいときにどう言えばいいかは分からないらしい。

「素直に『遊ぼうよ』って言うてみればいいんです」

「はあ……」

「僕が遊んであげますよ」「わたしも遊んであげる」というサティアンとチャッピーの申し出にマサユキは嬉しいけどどう答えていいか困っているようだ。

「じゃあ、ワークを終えてみて子供はどうですか？」とヒロがたずねる。

「正直……好きとはいえませんが、嫌いではない感じです」

マサユキの正直な感想はみんなの笑いを誘った。

このオレンジレッスンでの学びによってクミはいままでのステージを卒業した。そしてそのことは新しいステージでの予想もしなかった体験が始まることも意味していた。